



障害をもつ幼児の保育(20)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

子どもには大人の話が聞こえている

M 前回、大人から見ても分かりにくい行動をする

子どもは、特別に鋭い感覚をもっていることが多
いと話しました。大人同士が何げなくその子のこ
とを話していると、自分のことを悪く言っている
のではないかと、警戒しています。ときには妄想

に近くなってパニックを起こします。

F それが幼児だと激しく泣きわめいたりするの
ですね。

M そのとおりです。そのことは大人も子どもも
共通です。

生きる場のひとつとしての作業所

F それで私共は、先月号（第一〇三巻 三月号）に話したY君の参加している工房（作業所）

を、先週訪問しました。この作業所はY君が地域の養護学校の高等部を卒業したときに、Y君のお母さんが中心になって立ち上げたのだそうです。

初めはマンシヨンの一角を借りてやり始めたそうで、私たちが外から車で通りましたが、普通のマンシヨンですから周囲との関係は大変だったでしょう。でもそれだけにメンバーの人が家にいるような感じでリラックスできたかもしれないと思います。

そうしているうちに、廃校になった中学の一角を借りられるようになって、きょう私たちが訪ねたのは、元中学校だった一室ですね。広い運動場もあって気持ちのいい場所でした。私たちが訪ね

たとき、広告のチラシを袋に入れる作業をやっている、みんな黙々と働いていました。メンバーの人は七、八人で、スタッフやボランティアは三、四人でしょう。

私はこのような作業所を見るのは初めてなので、ちょっとびつくりしましたが、ここは自閉症の人が主なので、このように決まったことをやって、ある程度達成感があることが向くののだといわれました。

M Y君はこの中では自由に歩き回ったり、表情もにこにこしていました。お昼に私たちがY君のお母さんと車でその辺を見にいこうとしたとき、Y君が大きな声で泣くような様子をしましたが、きっと引き留めたかったのでしょう。でも、お母さんが説明すると納得して先にお昼を食べていました。

F お昼休みになって私はほっとしました。とい

うのは、メンバーの中にとでもかわいらしい少女がいましたが、仕事からはなれてにこにこして楽しく体を動かしてダンスのような動きををはじめました。そのうち不安そうな顔で耳をおさえて何かを探るような表情になりました。私たちはこの人の落ち着かない激しさよりも、その間に見せる人なつっこさがかわいく感じられたので、穏やかに見守っているとパニックにならずに頭の中の嵐をやり過ごしたようでした。職員の人が「いつもはとてもすごいパニックになって大変なんです」と小声で話してくれましたが、その人のいる前ではそれ以上話せませんでした。

穏やかな環境をつくる

M そう、言葉を読まない子どもや大人でも、自分のことが好意をもって話されているか、心配や不安をもって話されているかは、ちゃんと分かり

ます。言葉を読まない人と接するときにはそのことをよく覚えておく必要がありますね。

F この子たちは特別繊細な人たちだから、こちらも繊細で穏やかな、明るい雰囲気を作れる人でありたいですね。お昼休みには、その少女がにこにこしてダンスのような身体の動きをしたり、スタッフの人も柔らかい雰囲気でした。期限のある作業はどうしても真剣になってやりますし、また能力の高い人が多いときには、能力の低い人は叱られたり、注意されたりすることが多いようですね。聴覚が鋭い人や私たちに聞こえない話し声まで聞こえるような人には、叱ったりとげとげした言葉は、つらいとか危険でさえありますね。

M 私はこの少女の身体の動きの表現に合わせて、私なりに身体の動きをしました。そのことが、この少女に自分らしく動いていいのだという安心感を与えたのではないか、と思います。ほん

の短時間しか付き合えなくて残念でしたが。

愛育養護学校で

M ちようどその翌日、私の学校の幼稚部で、私は似たような経験をしました。その子は最近突然泣き叫ぶことがあるので、どういう訳だろうかかと考えていて、その子がシャワー室で水遊びをしていたときに、ガラスを隔てた更衣室で担任の職員と話をしていました。その子は急に泣き始めました。その子のことを批判的に見ていたのではないけれども、その子は私共が話していたこと自体になにか疑念を抱いたのではないかと私共は反省しました。

その翌朝、その子は幼稚部のクラスルームの床にマジックで色を塗っていました。



四角く張り合わせた床を一つずつしっかりと塗ることを熱心にやっ

ていました。この頃ずっと床を塗っていて、それが初めのころよりも部屋全体に広がって、とてもきれいなのです。私は思わず「きれいだねー」と心から感心して声をかけました。そうしたら、その子が私の顔を見上げてにっこりと笑ったのです。本当にかわいい、いい顔でした。それまで私の子の脇を通ってもその子には全く関心がないうように私を見なかつたのです。私も遠くから見

て通り過ぎることが多かつたのです。

F この日はそれまでとは違つたのですね。

M ええ、それまでは、その子は私には無関心に見えたけれど、大好きな若い保育者たちとはとても楽しくやっていたので、私はそれを見たり、その保育者たちから話を聞いて、質問したり意見を述べたりしていました。

F その子が木の床にマジックで色を塗っても黙って見ていたのですか。

M それはもう何カ月も前のことですが、最初にマジックで塗ったときには、その子の心の奥にある美的感覚には気が付きませんでした。でもじきにそれは美しいと思いました。この繊細で傷つき

やすい子が自分からやり始めたことは、やらせてやりたいとすぐに思いました。そして部屋中がいろいろな色で塗られたとき、部屋全体が違う部屋になったかのように、美しく輝いたのです。いまだったら、見る人だれでもきれいと思うでしょう。皆が歩く床ですから、じきに色は褪せてきまされども。

F つまり、子どもがやり始めたことは、大人にとっては最初は無価値のように思えても、大人だけが考え、計画したのとは違った環境がそこに生まれるというのですね。

M その通りです。子どもは社会を作る重要な一員です。子どもの考えることに真剣に耳を傾け

て、一緒にこの世界を作って行こうとするときとよいものが生まれます。

実践知について

子どもの前で、子どものことを話さないということは、私にはとうに分かっていたはずですが。それなのに、同じような誤りをしてしまいます。子どものアイデアを生かすならば、思ってもいなかったよりよい共同の社会が作られることを忘れてしまいます。障害をもつ幼児を保育するとき、まずたいせつなのは、人を偏り見ないという根本です。障害をもつ幼児の保育の実践で、大人はそのことを学びます。その実践知が社会を根本から変える力になるのだと私は確信しています。